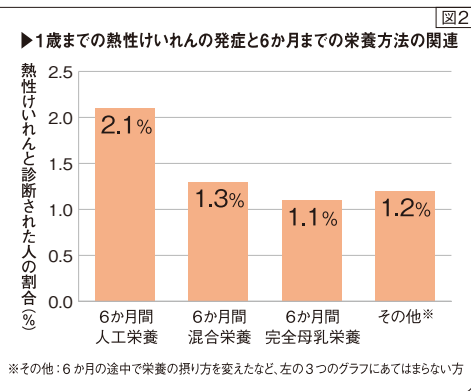
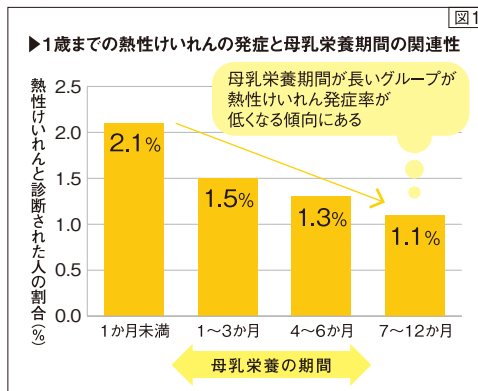


① 母乳で赤ちゃんの熱性けいれんが起こりにくくなる？

「1歳時における授乳期間と熱性けいれんの関連」より



今回、正期産(37週以降)で生まれたお子さん84,082人を対象に、1歳までの熱性けいれんと母乳栄養期間の関連性について調査しました。1歳までに熱性けいれんと診断されたお子さんは全体の1.2%(995人)でした。母乳栄養期間には、保育所等の利用、兄弟児の有無など多くの要素が関連しているので、それらの影響についても調整しましたが、母乳栄養期間が長いお子さんや生後6か月まで完全母乳栄養で育ったお子さんでは、母乳栄養期間が短いお子さんや混合栄養・人工栄養で育ったお子さんに比べ熱性けいれんが起こりにくいことがわかり、母乳栄養が乳児期の熱性けいれん発症リスクを下げる可能性が示唆されました。

熱性けいれんは、生後6か月から5歳頃までに、38度以上の発熱時に起きるけいれん発作です。典型的には熱の上がり際に突然意識がなくなり、身体が硬くなり手足を震わせ、顔色も悪くなりますが、多くは5分以内に自然におさまります。熱性けいれんの起きやすさにはご両親も熱性けいれんを起こしたことがあるなど遺伝的要因が大きいといわれていますが環境要因との関連についてはあまり知られていません。熱性けいれんの発症年齢は1~2歳がピークですので、今後2歳、3歳の時点での熱性けいれんのおこりやすさと環境要因との関連性についても引き続き解析していく予定です。



満田 直美先生
高知大学医学部
環境医学教室
特任助教 / 小児科医師